読者の広場

「劔岳 点の記」を第2の「黒部の太陽」に

元気のない建設業界のカンフル剤へ

日刊建設工業新聞社編集局 編集部長　佐々木 修

建設業界に元気がない。建設事業費の削減に伴う過当競争で，建設企業は軒並み業績を落とし，苦境にあえいでいる。公共事業や建設企業に対する社会的批判も加わり，建設技術者は自信をなくしているようにさえ見える。閉塞（へいそく）状況から若い人材が入ってこなくなり，優秀な人材の確保・育成が建設業界全体の深刻な問題となりつつある。

これまで役所やゼネコン，建設コンサルタントなどの多くの建設関係者にインタビューしてきた。「なぜ，建設業を選んだのか」と聞くと，一定以上の年代からは「ものづくりに携わりたかったから」「自然相手のスケールの大きな仕事だから」といった答えが返ってきた。あこがれや興味を抱くきっかけとして，映画「黒部の太陽」を挙げる人も多い。黒部ダム建設の苦闘を描き，1968年に公開されたこの映画は，建設業のダイナミズムを社会に強くアピールした。

現在，東映が新田次郎原作の「劔岳 点の記」を映画化している。切り立った岩肌と自然の脅威で人間を拒絶し，未踏の山として君臨してきた劔岳の山頂に，三角点を設置しようと黙々と仕事に献身する実在の測量官を描く。

測量業界にとって，この映画は明るい材料だ。勇気を持って果敢に仕事に挑み，成し遂げようとする先達の姿は，現代の測量技術者が自らの存在意義を再確認し，自信を取り戻すことにもつながるはずだ。映画を見た多くの若者が測量に興味を持ち，自らのなりわいとする契機になればなおよい。事業の最も川上に位置する測量業界が活気を取り戻せば，建設コンサルタントやゼネコン業界も良くなる。

カメラマン出身の木村大作監督は，「アルプスで豆粒のような人間が，重い荷物を背負って黙々と歩いている映像を見れば，納得してもらえるはずだ」と自信を示す。広く一般の関心を呼び，この映画が第2の「黒部の太陽」となり，建設業界のカンフル剤として機能することを願ってやまない。